第６章

外部化された家事・教育・ケアの利用

大和　礼子

１．はじめに

この章では、外部化された家事・教育・ケアがどの程度利用されているのかについて見ていく。外部化のあり方としては、商業化と、公共化（公的社会保障によって費用が一部あるいは全部カバーされるもの）がある。また家事・教育・ケアの形としては、サービスそのものを利用する場合と、モノを利用する場合がある。

インタビューの対象者は、表６－１にまとめたように、郡部、市部とも、男女それぞれ５ケースづつ、計 20 ケースである。ただし、市部の男性３ケースについては、妻が同席していたので、妻の意見も聞いた。また郡部の女性・男性それぞれ 1 ケースについては、録音のミスにより、この章に関連するいくつかの質問のデータが残されていないため不明であり、その場合は有効ケース数からはずした。したがって、有効ケース数は、両ケースともデータがない場合は 18 ケース、どちらか一方のみデータがない場合は 19 ケースとなる。また、子どもの有無については、市部の男性で子どもがいないケースが 1 ケースある。したがって、子ども関連の質問の有効ケース数は、先に述べた回答不明の状況により、17 または 18 となる。

表６－１　インタビュー対象者のケース数・その他

		インタビュー対象者のケース数	2 ケースとも回答不明の場合	女性ケースが回答不明の場合	男性ケースが回答不明の場合	子どもがいるケース
郡部	女性	5	4	4	5	5
	男性	5	4	5	4	5
市部	女性	5	5	5	5	5
	男性	5	5	5	5	4
計		20	18	19	19	19

２．食に関する外部化

まず、食に関する外部化から見ていこう。食に関する外部化としては、「食事宅配サービス」「出来合いの惣菜」「持ち帰り弁当」「出前（ピザの宅配なども含む）」「外食」「食器洗い機」の利用についてたずねた。

最も多く利用されていたのは「出来合いの惣菜」を買ってくることである。これは郡部、市部ともによく利用されていた。利用している人は、ほとんどの人が、献立に一品加えるという形でかなり日常的に利用していた。出来合いの惣菜を利用することによって、日々の献立が栄養のバランスがとれたものになるようにしている人も多かった（「肉類が足りないから惣菜を利用する」あるいは「野菜が足りないので惣菜で補う」など）。また、夫婦 2 人暮らしなど家族が少人数の場合は、献立によっては、自分で作るより出来合いの惣菜を買う方が安くつくという人もいた。

次に多く利用されていたのは、「外食」だった。特に市部での利用が多かった。外食の利用のしかたとしては、次の 4 タイプに分けることができた。

①日常の食事のひとつとして利用する場合（たとえば、週末の昼または夜はほぼ毎週、夫婦で、あるいは子どもたちと一緒に外食に出かける、など）。

②日常のイベントとして利用する場合（たとえば、月 1 回程度、家族で外食に出かけるなど）。

③非日常のイベントとして利用する場合（たとえば、年 2 ～ 3 回子ども家族が帰省したとき外食に出かける、夫婦で外出した時外食する、など）。

④家族とではなく、友人との交際として外食する場合。

郡部では③と④が多かった。郡部で①の形で利用しているのは 2 ケース（8 ケース中。他の 2 ケースは回答不明）だけだった。それに対して市部では、①と②が多く、①と②どちらもそれぞれ 4 ケース（10 ケース中）がこの形で外食を利用していた。①の形で利用している人のほとんどは、妻に対する「主婦業の休み」という意味もあってこのような利用をしていると述べている。

「食事の宅配サービス」については、郡部、市部ともほとんど利用されていなかった。また「持ち帰り弁当」「出前」「食器洗い機」なども、郡部、市部とも、利用している人は少なかった。「持ち帰り弁当」については、郡部で、来客の時に寿司などの持ち帰りを利用するという人が多かった。そのような非日常の場合ではなく、日常の食事として持ち帰り弁当を利用しているのは、男性が食事を作らなければならない状況にある人々である。また女性で「持ち帰り弁当」を利用する場合として、「仕事で帰るのが遅くなった時、子どもが塾に行く前に食事をとらせるため仕方なく利用する」という人もいた。「出前」については、郡部、市部とも、来客時に利用するという人がほとんどだった。

3．衣・住に関する外部化

衣・住に関する外部化としては、「クリーニング」「掃除サービス」についてたずねた。「クリーニング」はほとんどの人が利用していたが、ワイシャツなどの洗濯のために日常的に利用すると答えたのは少数派であり、郡部で 2 ケース（8 ケース中。他の 2 ケースは回答不明）、市部でも 2 ケース（10 ケース中）だけであった。その他はすべて、季節の変

わりめ（衣替えの時）や冠婚葬祭など特別の衣類を着たあとに利用すると答えている。また子どもの学生服などは、かつてはクリーニングを利用していたが、最近ではドライクリーニング対応の洗濯機を利用して自宅で洗うようになったという人もいた。これは、以前は外部化（商業化）されていた家事労働が、今は家内領域で無償で行われるようになったという、家事の外部化とは逆の方向の変化もあるということを示している。

「掃除サービス」については、自宅で日常的に利用している人はいなかった。換気扇の掃除サービスを、「無料でお試し」として利用した人が 1 ケースあった。また、別居の親がホームヘルパーを利用しており、その一環として掃除の援助を利用しているという人は、2 ケースあった。またこれ以外に、毎月 3,000 円の料金で、電球が切れた時は電話をすれば取り替えてくれ、年に一度はすべての電球を取り替えてくれるというサービスを利用している例も 1 ケースあった。これらの利用者はいずれも市部である。郡部でも、電話で掃除サービスの勧誘を受けたという例が 1 ケースあったが、利用はしていなかった。

4．家事全般に対する外部化

家事全般に対する外部化としては、「家政婦」と「便利屋」の利用についてたずねた。これらを利用している人はまったくなかった。「便利屋」については、2 人の男性が、「自分がいわば家族の『便利屋』だから必要ない」と述べていた。どちらも市部の若い世代であり、若い世代の男性は、いわゆる料理・洗濯といった定型的な家事はしていないかもしれないが、家族のさまざまな非定型的な雑用を担っていることを、このような回答は表しているのではないだろうか。

また、先の項で見た「掃除サービス」や、この項で取り上げた「家政婦」「便利屋」を利用している人は、他の家事サービス・商品に比べて著しく少なかった。山根真理による家事に関する規範の分析によると、同じ家事の商業化であっても、「外食」への抵抗感は弱いが、「炊事・掃除を人にやってもらうこと」「ベビー・シッター」への抵抗感は強い。つまり、「他人を家に入れること」への抵抗感が強いようなのである(山根,1997)。このインタビューの結果も、山根の分析結果とほぼ同様の傾向が現れたといえるのではないか[1]。

5．子どものケアと教育に関する外部化

子どものケアに関する外部化としては、「保育所」「ベビー・シッター」「学童保育」について、また子どもの教育に関する外部化としては、「学習塾・家庭教師」「お稽古事」についてたずねた。

まずケアに関して、「保育所」を利用した人は、郡部 7 ケース（9 ケース中。1 ケースは不明）、市部 3 ケース（9 ケース中。1 ケースは子どもなし）であり、郡部の方が多い。これは、郡部の回答者の 1 人が「このあたりでは、両親が働いているかどうか関係なしに誰でも保育所へ行く。幼稚園に行く前になじむためと、園児が少ないから行ってくださいと

いうことで」と述べているような状況があるからかもしれない。また郡部では市部ほど生涯専業主婦化が進んでおらず、農業に従事したり断続的に勤めに出たりする人が多く、保育所を利用する層が市部より多いといったこともあるかもしれない。インタビューではその理由を明確にできなかった。次に、保育所の利用についての抵抗感を聞くと、「皆が行っているので抵抗感はなかった」「最初の子の時は少しあったが、幼児教育ということも言われているし今は抵抗感はない」「好きではなかったが、子どもをなじませ、友達が多いほうがよいと思ったから利用した」というようなことが述べられた。全般的に抵抗感は少ないように思われた。一方、市部で保育所を利用した 3 ケースは、「幼稚園が定員いっぱいで入れなかったため、保育所に行かせた」「幼稚園に行く前の 1 年間、子どもをなじませるため行かせた」「上の子どもの時は仕事をしていなかったので利用しなかったが、下の子どもの時、パートタイムの仕事を始めたので利用した」というものだった。

次に、「 ベビー・シッター」「学童保育」を利用した人はほとんどいなかった。子どもを預ける必要があった時どうしていたかを訪ねると、郡部では同居していた親に見てもらったという人が多かった。市部では、親と同居していた人はそのようにしていたが、近くに親がいない人は、近所の人に預けてその時はとても助かった、と述べていた。自分の子どもを預けたことはないが、兄弟姉妹の子どもをよく預かったという人もいた。また、親や姉妹に預けるほかに、上の子どもの幼稚園の行事の時や買い物をする時、民間企業による一時的託児所（ベビー・ルームなど）を利用していたという人もいた（1 ケース、女性）。この人は、利用する前によく見学して納得して選んだので、問題はなかったと述べている。

次に教育について見ると、「学習塾・家庭教師」（おもに学習塾）を利用した人は、郡部では 6 ケース（8 ケース中。2 ケースは不明）、市部では 8 ケース（9 ケース中。1 ケースは子どもなし）であった。また「お稽古事」を利用した人については、郡部では 6 ケース（8 ケース中）、市部では 8 ケース（9 ケース中）であった。お稽古事の内容は、郡部ではスイミング、習字、そろばん、武道などであり、市部では、スイミング、習字、そろばん、ピアノ・エレクトーンなどがあった。

子どもについては全体的に、ケアのサービスより、教育のサービスの方がよく利用されているようである。

6．高齢者などのケアに関する外部化

高齢者などのケアに関する外部化としては、「ホームヘルパー」「ディサービス」「ショートステイ」「入浴サービス」「介護用品（の貸与）」の 5 項目についてたずねた。

郡部では、「ディサービス」が最もよく利用されており、3 ケース（9 ケース中。1 ケースは不明）が利用していた。ディサービスを利用した 3 ケースは、他の項目は利用していなかった（ディサービスの間に入浴サービスを利用する場合は除く）。ただし、この 3 ケー

ス中 1 ケースは、質問した 5 項目には含まれていないが、訪問看護サービスを利用していた。また、ディサービスを利用した 3 ケースのうち 2 ケースは、健康な高齢者が利用していた。これはこの町の行政が年に数回、集落単位で高齢者（健康な人も含む）をディサービスに招待し利用してもらうということを行っているからであろう。ディサービス以外については、「ショートスティ」だけを利用したことがある人が 1 ケース、「介護用品」（エアマット）を借りたことがある人がそれぞれ 1 ケースであった。どの項目も利用したことがないという人は、残りの 4 ケース（9 ケース中）であった。

市部では、どの項目も利用したことがないという人が 6 ケース（10 ケース中）であった。残りの 4 ケースはどれも、複数の項目をあわせて利用しており、5 項目全部を利用している人が 3 ケース、3 項目を利用している人が 1 ケースであった。利用者した 4 ケースはいずれも、サービスの利用によって非常に助かっていると述べている。

以上のように郡部では、何らかの形で 1 項目だけサービスを利用するという使い方が多いのに対し、市部ではヘビーユーザーとまったく使ったことのない人に 2 分される傾向があった。

7．利用したいもの・利用したくないもの

（1） 利用したいサービス・モノ

最後に、ここまでで取り上げた様々なサービス・モノのうち、今後利用したいものと、今後も利用したくないものについてたずねた。まず、今後利用したいものについて見てみよう。

(a) 高齢者のケアに関するサービス・モノ

今後利用したいサービスとして最も多くの人があげたのは、高齢者のケアに関するサービスやモノ、つまり「ホームヘルパー」「ディサービス」「ショートスティ」「入浴サービス」「介護用品（の貸与）」などだった。「家政婦」や「便利屋」をあげる人も、その多くは高齢期になって助けが必要な時に利用したいものとしてあげていた。

郡部では、先にあげた 5 項目「ホームヘルパー」「ディサービス」「ショートスティ」「入浴サービス」「介護用品（の貸与）」のうち、今までどれかを利用したことのある人（＝5 ケース）の中で、今後も利用したいという人は 3 ケースであった。また、今まで利用したことのない人（＝4 ケース）のうち、今後は利用したいという人は 1 ケースだけであり、それは女性であった。

次に市部について見ると、今まで利用したことのある人（＝4 ケース）の中で、今後も利用したいという人は 2 ケースだった。残りの 2 ケースは、質問項目にあげたような在宅介護のためのサービスではなく、施設介護を希望していた。この施設介護をも含めると、利用したことのある 4 ケースすべてが、高齢者ケア関係のサービスの利用を希望していた（ただしそのうちの 1 ケースでは、妻はサービスの利用を希望していたが、夫は利用した

くないと述べていた)。また、今まで利用したことのない人（=6 ケース）のうち、今後は利用したいという人は5ケースで、残りの1ケースは「先のことなので、まだわからない」という答えだった。質問項目としてあげた5項目のほかに、高齢者が1人で利用できる介護付きタクシーを利用したく、現在探しているという人もあった。

以上から、高齢者のケアに関連するサービスやモノについては、郡部では、利用経験がある人は今後利用したいと考えるが、利用経験のない人は利用したくないと考える傾向にある。一方市部では、利用経験のある人もない人も、利用したいと考えている。

ところで、高齢者のケアに関連して、サービスを利用しながらの在宅介護を希望する人と、施設介護を希望する人がある。「サービス＋在宅介護」を希望する人の理由としては、「自宅で気ままに暮らしたい」「施設には抵抗がある」（以上は自分の介護に関して）、「子どもとして自宅で介護してやりたい」（親の介護に関して）というものであった。一方、「施設介護」を希望する人の理由としては、「家族に迷惑をかけたくない」「自分の介護によって配偶者の人生をめちゃくちゃにしたくない」「サービスしてくれる人を家に入れるには抵抗がある」（以上は自分の介護に関して）、「専門施設に入っているお年よりは楽しそうにしているという話を、ケア関連の仕事をしている子どもから聞いて、そうかなと思う」（親の介護に関して）などがあった。

(b)　高齢者のケア以外のサービス・モノ

次に、高齢者のケア以外の項目について、「今後利用したいもの」を見ると、郡部ではすべてのケースが、今後利用したいものは「特にない」と答えている。それに対して市部では、「食器洗い機」を利用したいという人が4ケース（10ケース中）あり、すべて女性であった（夫婦インタビューとなった妻の回答も含む)。食器洗い機を今まで導入しなかった理由としては、「置く場所がなかった」「以前は必要ないと思っていた」「多人数の家族用の製品がなかった」などがあげられている。

（2）　利用したくないサービス・モノ

(a)　高齢者のケアに関するサービス・モノ

次に利用したくないものについてみていこう。郡部では、高齢者のケア関係のサービスを利用したくないという人が多かった。高齢者のケア関係のサービスを利用したくないものとしてあげた人が2ケース、また今後利用したいものは「何もない」と答えた人が4ケース、合わせて6ケース（9ケース中）が利用したくないとしている。その理由としては、「家族で介護をするから」「サービスを利用するのに周囲の人が否定的」「入浴などを他人に介助してもらうには抵抗がある」「他人に家の中に入ってもらうには抵抗がある」「サービスを利用すると料金がかかる」などがあった。このように郡部では、高齢者のケアについて、外部化されたサービスを利用することに対する抵抗感が強い。しかし、病院で入院などをして世話を受けることに対する抵抗感はほとんどない。つまり同じケアであっても、医療

という文脈では抵抗感はないが、介護（あるいは福祉）という文脈では抵抗感が生じるようである。

一方、市部では高齢者のケア関係のサービスを利用したくないというケースは、1 ケースを除いて、なかった。その 1 ケースについては、妻は利用したいが夫は利用したくないと述べていた。

(b) 高齢者のケア以外のサービス・モノ

高齢者のケア以外で、利用したくないものを、その理由によって分けると次のようになる。

(1) 「自分（家族）がしたほうがいい」

宅配食事サービス、出来合いの惣菜、食器洗い機、掃除サービス、ベビー・シッター、家政婦、便利屋

(2) 「自分（あるいは家族）がしたら無料だが、サービスを頼めば経済的負担が生じる」（ただし、これは(1)の理由と明確に区別しにくい）

宅配食事サービス、掃除サービス、家政婦、便利屋

(3) 「栄養のバランスが悪いから利用したくない」

出前、持ち帰り弁当

(4) 「他人に家の中に入ってもらうのに抵抗がある」

掃除サービス（ある女性回答者は、「サービスの人が来るまでに自分で掃除しなければだめというような感じがする」と述べている）。

(5) 「サービスをする人がかわいそうな気がして、自分は好きではない」

家政婦

以上から郡部では、高齢者のケア関係のサービスも家事関係のサービスも、利用には抵抗感が強い（高齢者のケア関係については、今まで利用したことのない人に特に強い）。一方市部では、高齢者のケア関係のサービスに対する抵抗感は弱いが、家事関係のサービス、特にサービスする人に家の中に入ってもらわなければならないサービスに対する抵抗感は、先に山根の分析で見たように、強いといえよう。

8．おわりに

以上の結果から、外部された家事・教育・ケアの利用についてわかったことは、次のようなことである。

(1) 衣・食・住などに通常の家事に関するサービス・モノについては、人を家に入れなければならないサービスに関する抵抗感は強いが、それ以外のサービス・モノの利用についての抵抗感はそれほど強くない。特に、郡部より市部の方が、そして日常時の利用より非日常での利用（来客、冠婚葬祭）の方が、抵抗感は弱い。

(2) 子どもに関連するものとしては、教育サービスの利用の抵抗感はほとんどないが、保

育サービスの利用には抵抗感がある。しかし、郡部では、保育所は皆が行くという形になっているので、抵抗感は弱い。

(3) 高齢者のケアに関するサービス・モノについては、郡部・市部ともに、利用経験のある人は抵抗感が弱く、ない人は強い。また全体的に、郡部では抵抗感が強いが、市部では弱い。高齢者のケアに関しては、人を家に入れることに対する抵抗感は、通常の家事サービスに対するそれほどには強くない。自宅で介護を受けるためならば、各種の在宅サービスを受けることには抵抗がなく、むしろ自分が施設に入所する、あるいは親を入所させることに抵抗感を持つ人がいる。その一方で、在宅介護より施設を利用したいという人もいる。この選好には人により多様性があるようであり、この多様性に対応する必要が、今後、各種の制度に求められるだろう。

【注】

(1) 家事の外部化に関して、「人を家に入れることに対する抵抗感」に注目する視点は、研究会などの中で出た、山根真理氏の議論に負っている。ここに記して謝意を表したい。

【文献】

山根真理, 1997,「家事に関する規範: 近代的家事規範から自由なのは誰か」, 山根・斧出・藤田・大和『家族多様化時代における家事分担の変容可能性に関する調査研究』コープこうべ・生協研究機構: 56-72.